読む・知る・つながる大体大マガジン

OUHS JOURNAL

OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES

Vol.237 2025.12.19

〈巻頭特集〉
フレンドリーマッチ

〈旬な大体大生〉
第58回雨山祭実行委員長
西村 颯知さん
SOUCHI NISHIMURA

大体大

大阪体育大学
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES

旬な大体大生

第58回雨山祭実行委員長

西村颯知（にしむら そうち）さん

スポーツ科学部・2年

兵庫県出身。兵庫・北条高校ではバスケットボール部。1年生の昨年、大学祭「雨山祭」の実行委員を務め、2年生の今年は実行委員長。他にオープンキャンパス運営学生チーム「Bow!can's」（ボーキャンズ）、ハンドボール部女子交流戦「フレンドリーマッチ」の運営メンバーも務める。スポーツマネジメントコース所属。

西村颯知さん（スポーツ科学部2年、兵庫・北条高校）は「学生のうちにいろいろな経験をしたいから」と大学祭「雨山祭」の実行委員長に立候補した。ほかにもオープンキャンパス、フレンドリーマッチなどイベント運営に奔走する。西村さんに学生生活でのやりがい、楽しさについて聞いた。

――雨山祭をやり通した感想は

2日間ともまさかの大雨。1日目は雷警報で一時中断したが、今年からステージに屋根をつけたこともあり、すべてのイベントを実施できた。雨山祭の実行委員会は、ぼくたち2年生四役4人と1年生の実行委員で運営するが、今年の実行委員は昨年より6人少ない11人で苦労することも多かった。でも、無事開催できて、委員長をやってよかったと思う。

――一番良かったと思うことは

地域のお店から協賛金をいただくなど、大学にいるだけではできない社会経験ができたこと。協力いただいた方に還元するためには、パンフレットに広告を載せるのはもちろんだが、大学祭を盛り上げて学生にも地域から参加した方にも喜んでもらうことが必要だと思い、委員みんなで頑張った。

――雨山祭は1年生が実行委員を務めることが伝統だが、その理由は

体大生は実習やクラブが忙しく、3年生では時間がないことが理由にあると思う。だが、1年生が何も知らない状態で実行委員会に入り、一から考えることで、斬新な企画やアイデアを出してくれる。メリットも大きいと思う。

――なぜ1年生の時に実行委員会に参加したのか

高校の時、体大のことを調べるうちにインスタで雨山祭のアカウントを見つけて興味を持った。昨年は実行委員会のプレハブの中で1年生同士の距離がグンと縮まり、自分たちのやりたい雨山祭ができたと思った。さらに、学生のうちにもっといろんなことをしたいし、人と人のつながりを広げることが大事だと思い、委員長に立候補した。

――大学の4年間でやりたいことは

高校では先生に言われて動くところがあったが、大学に来て一番思うのは、自分から動かないと何も得られない。逆に大学では自分の好きなことができる時間があり、自分から動けば何でもできる。これからはイベントのほか、自分が小学生のころ大学生に指導してもらって楽しかった自然学校のリーダーにも挑戦したい。

学園祭

第58回 雨山祭

「結（リンク）」テーマ　多彩に

学園祭「第58回雨山祭」が、10月25、26日、熊取キャンパスで開かれた。

今年のテーマは「結（リンク）」。学生同士、地域の方々など、多くの人々につながるイベントにしたいという思いが込められた。

特設ステージ横に並んだテントでは、学生たちが焼き鳥屋さんやフリーマーケットを運営。フリ模擬では、たい焼き、からあげ、ローストビーフ丼、ハンバーガー、クレープ、アサイーボウルなどのグルメが提供された。

球技イベントも人気で、第4体育館では「ドッジビー」「バレーボール」が行われ、事前に参加申し込みをしていた学生が参加した。ドッジビーはソフトディスクを使ったドッジボール形式のゲーム。バレーボールは、白熱した対戦となり、体大生らしく全力でスポーツを楽しんだ。

ステージではシュークリーム・シャトルラン、クイズ体大王などで学生が競い合った。毎年恒例の「のど自慢大会」では元気いっぱいの歌声で会場を盛り上げた。

また、今年はお笑い芸人を多数招き、レイザーラモンHGさんが司会したビンゴ大会やミサイルマン、マイスイートメモリーズ、モンスターエンジン、エグスプロージョンなどのお笑いライブで、会場は大いに盛り上がった。

2日間、雨が激しく降る場面もあったが、観客席には、地域の方々のほか、クラブのメンバー、司会を務めた学生やステージで出場した学生のご家族の方も応援にかけつけ、ステージと観客席が一体となり温かい雰囲気に包まれた。

最後に、雨山祭実行委員全員がステージに上がり、運営に関わった感想を話した。「雨山祭で仲間とつながり、多くの人の協力があって開催することができ、何ものにも代えがたい経験ができた」と涙を流す学生もいた。

模擬店やフリーマーケットのブース

白熱したバレーボール大会

観客席に詰めかけた来場者

クイズ体大王

contents

01 旬な大体大生

02 第58回「雨山祭」

03 巻頭特集
ハンドボール交流戦「フレンドリーマッチ」

05 NEWS
1 国立台湾師範大学と交流
2 台湾国立体育大学と発表会
3 上海体育大学を訪問
4 復興支援「サンライズキャンプ」
5 ハンドボール女子インカレ12連覇
6 やり投げフェスティバル
7 侍ジャパン女子アジアカップ4連覇
8 坂ちはる日本陸連新人賞

09 大体大PEOPLE
三橋眞奈:サッカーコーチ・大学院生

11 EVENT
1 万博でボーシャー
2 万博でガチダンス
3 同窓会「摂泉会」55周年式典
4 永寿小児童が本学訪問
5 大分県が本学講座採用
6 前島教授に学会活動奨励賞

13 コラム　窓

14 コラム　ボーシャー

フレンドリーマッチ Friendly Match 2025

両チームで記念撮影

ハンドボール部女子交流戦「フレンドリーマッチ2025」が12月5日、大阪体育大学第6体育館で開催され、大阪体育大学と関西学院大学が対戦した。フレンドリーマッチは学生が企画・運営して地域の方を招く恒例のイベント。今年は、17日開幕の日本選手権で初優勝を目指すハンドボール部女子に、観客が応援メッセージを寄せ書きした横断幕がサプライズで贈呈された。

ハンドボール交流戦フレンドリーマッチ。
コートサイド席は観客、２階席は応援の各クラブ部員で埋まった

フレンドリーマッチは２０１７年、親交があった大阪体育大学と武庫川女子大学のバスケットボール部女子間で開催されたのが始まりだ。毎年、交互に両大学で開催され、今年、バスケットボールは武庫川女子大学で開催された。一方で大体大では、ハンドボール部の交流戦が隔年で企画され、２年前はハンドボール部男子、今年は女子の交流戦が実施された。

フレンドリーマッチは、学生が自ら企画して、有料試合を運営することが大きな特徴だ。スポーツマネジメントコースの学生や試合の企画・運営に関心がある学生、学友会など、今年は25名がサポートチームを結成。統括、企画、広報、渉外の４部門に分かれ、全クラブの統括部局であるスポーツ局の助言を受けながら、７月ごろから週１回の全体会議、各部門の会議などを通じて準備を重ねた。販売促進のアイデアを考え、スポンサーの獲得、ハーフタイムでのイベント内容やチケット・ポスターのデザイン・印刷、前売り券販売、当日の運営などにあたった。

これらの活動が評価され、フレンドリーマッチは２０２３年、スポーツ庁から「大学スポーツによる地域振興の推進事業」として全国10大学の一つに選定された。今年は一般社団法人大学スポーツコンソーシアムＫＡＮＳＡＩ（ＫＣＡＡ）の応援促進プログラムで最優秀賞を受賞した。

試合当日。会場の第６体育館多目的アリーナには、両大学やチームの関係者、選手の家族、卒業生、各クラブの部員ら多数が詰めかけた。

試合前には、体育実技研究部の学生が地元の小学生らを招き、ボール鬼ごっこやミニゲームなどのハンドボールレクリエーションで競技の楽しさを伝え、大阪府立日根野高校ダンス部ＩＲＩＳが試合前パフォーマンスを演じ、アリーナを盛り上げた。

ＤＪはプロのスタジアムＤＪ、貢藤十六（くどう・とうろく）さん。イベント照明が明滅し、アリーナはコンサート会場のようにショーアップされた。

試合は午後６時半、スローオフ。スピーディーな攻防が続き、投げ、跳び、体をぶつけあうハンドボールのダイナミックな魅力が詰まったプレーが展開された。コートサイドの観客席は家族や地域の方らで埋まり、入口で配られたハリセンを叩きながら、応援した。また、立ち見の２階席にはバスケットボール部男女、硬式野球部男子、バレーボール部男子など多くのクラブ部の部員でぎっしり。盛んな声援が送られた。

得点の度に盛り上がるベンチ

FriendlyMatch

ハーフタイムには、大阪・関西万博の公演にも参加したダンス部が華麗なパフォーマンスを披露。続いて、関西でトップクラスの実力を誇るダブルダッチ部が、ロープパフォーマンスを織り交ぜたダイナミックな演技で会場を沸かせた。

試合は11月の全日本インカレで12連覇を達成した大阪体育大学が優勢に試合を進め、新チームで臨んだ関西学院大学に45-14で勝利した。

クロージングセレモニーでは、サプライズ企画として、日本選手権に向けて、来場した観客が応援メッセージを寄せ書きした横断幕が、学生サポートチームから大体大に贈られ、高来葵美（たかぎ・あいみ）主将（体育学部4年、石川・小松商業高校）、東瑚華（あずま・このか）選手（体育学部3年、千葉・昭和学院高校）と学生スタッフが観客席に披露した。

また、MVPは好セーブを連発したGKの比嘉楓選手（体育学部4年、沖縄・那覇西高校）が選ばれ、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンのペアチケットが贈られた。

ハーフタイムイベントに出演したダンス部

MVPを受賞した比嘉楓選手

応援メッセージ横断幕を披露する選手と学生スタッフ

最後に、高来主将が「インカレ12連覇は皆さんの応援のおかげです。日本選手権では、もう一度このメンバーで日本一を目指して全力で戦ってきます」とあいさつ。楠本繁生監督は「関西学院大学の皆様、ありがとうございました。また、スポーツをするだけでなく、『見る』『支える』の立場からこのような場を用意していただき、ありがとうございました。今日応援に来てくれた多くのクラブとともに切磋琢磨し、大阪体育大学の名をアピールできるように頑張っていきます」と感謝の言葉を述べた。

「日本選手権で日本一を目指す」とあいさつをする高来葵美主将

また、関西学院大学の田中志織主将は「新チームで初となる試合でしたが、とてもいい経験になりました。大阪体育大学とともに関西のハンドボールを盛り上げていきたい」、加納庸光監督は「大阪体育大学は絶対王者ですが、そんなチームが関西にあるのは誇りです。大体大の姿を追いかけて頑張り、関東に負けないよう、ともに関西を盛り上げていきます」と語った。

閉幕後、両チームはいっしょに記念撮影をし、健闘をたたえ合った。

開場前のミーティングで最終確認をする学生サポートチーム

ハーフタイムイベントでパフォーマンスをするダブルダッチ部

あいさつをする楠本繁生監督

スポットライトを浴びながら紹介されるスターティング7の選手

体育実技研究部の学生が小学生らとハンドボールレクリエーション

オープニングセレモニーを務めた日根野高校ダンス部ＩＲＩＳ

国立台湾師範大学と交流

スポーツ心理学の権威招く

国立台湾師範大学の張育愷教授と神崎浩学長ら

スポーツ心理学の世界的な権威である国立台湾師範大学の張育愷（チャン・ユカイ）スポーツ・レクリエーション学部特聘教授らが9月29、30日に大阪体育大学を訪れ、両大学による学術・文化交流会が開催された。

一行は張教授と事務補佐の1名、大学院生7名の9名。29日は神崎浩学長を表敬訪問。30日は研究交流会が大会議室で行われ、張教授が基調講演を行った。

両大学の大学院生による口頭発表、両大学によるポスター発表もあり、国立台湾師範大学の大学院生による創作ダンスの披露、記念撮影などを通して交流を深めた。

また、中国拳法のワークショップを実施。一行は剣道、柔道の授業に参加したほか、日本の武道と中国拳法のデモンストレーションも行われた。

台湾国立体育大学と大学院研究交流発表会

研究交流発表会に参加した大阪体育大学、台湾国立体育大学のメンバー

台湾国立体育大学の湯文慈競技学部長ら教員4名、大学院生5名が9月22日、大阪体育大学を訪れ、両大学による大学院研究交流発表会が開催された。

研究交流発表会は小菅萌准教授（スポーツ心理学）、近藤衣美講師（スポーツ栄養学）、下河内洋平教授（スポーツ医学）、藤原敏行教授（スポーツバイオメカニクス）、橋本祐介教授（スポーツ医学）が順に座長を務め、両大学の大学院生各5名の発表の後、質疑が行われた。

発表会修了後は副学長の浜田拓教授（運動生理学）のあいさつに続いて神崎浩学長と湯学部長が記念品を交換した。

午後は、ポスター発表のセッションが行われ、竹内亮教授（理学療法学）が座長を務めた。その後、一行は、下河内教授、石川昌紀教授（身体運動中の神経筋機能メカニクス）の研究室を視察した。

上海体育大学を訪問

野田賢治理事長ら

大阪体育大学の野田賢治理事長、神崎浩学長ら代表団が10月13～15日、中国の上海体育大学を公式訪問した。

本学と上海体育大学は、今年4月25日、上海体育大学の魏建軍副学長らの来訪を受け、両大学間における友好交流覚書（MOU）を締結している。

一行は、訪問初日に楊浦区にあるメインキャンパスを視察。翌日には、毛丽娟学長を表敬訪問し、国際交流センターの張哲センター長らと共に意見交換を行った。会談の冒頭、毛学長は地理的に近い大阪との関係強化を通じて、教職員や学生の交流を積極的に展開していきたいと述べた。野田理事長は約40年前に本学と上海体育大学との交流が始まった経緯に触れながら、今回の相互訪問を契機に、大阪と上海の両大学の地理的近接性を活かした学生・教職員の実質的な交流が早期に実現し、両大学の発展に寄与することを期待していると述べた。神崎学長は「大学間の学術交流はもちろん、教職員・学生間の人的交流も今後ますます重要になる」と強調した。

大阪体育大学と上海体育大学の公式会談［上海体育大学提供］

サンライズキャンプ

18回目　学生が福島復興を支援

東日本大震災被災地で支援活動にあたる「第18回サンライズキャンプ　被災地復興支援活動ｉｎ福島」が9月15～18日の3泊4日、福島県南相馬市で実施された。

「サンライズキャンプ」は東日本大震災が起きた2011年の10月、福島県から大阪に避難した子どもたちと学生が大学構内で1泊のキャンプで交流しスタートした。翌12年はがれきや土砂の撤去が中心だったが、13年からは地域のNPO法人と連携し、高齢者への体力測定や仮設住宅でのサロン活動、公園など遊ぶ場をなくした子どもたちとのスポーツ交流など、その時のニーズに合わせて内容を少しずつ変えながら、支援活動を継続してきた。学生たちが健康科学、スポーツ指導など大学で学んだ知識を活かし、「体育大学だからこそできる支援」に取り組んでいる。

社会貢献センターが主催し、今年は応募があった学生16名と、第1回から参加しているスポーツ科学部・池島明子教授（レクリエーション、健康づくり）、中山健教授（スポーツ社会学）ら教職員4名の計20名が参加した。

一行は仙台空港に到着した後、津波や原発事故の被害などを伝える東日本大震災・原子力災害伝承館や地震・津波の被害の状況がほぼそのまま残る震災遺構の浪江町立請戸小学校などを見学した。夜は地元のNPO法人「つながっぺ南相馬」元代表の今野由喜さんから、車ごと津波にのみこまれた体験談を聴いた。16日は学生が地域の高齢者の体力、筋肉量、骨密度などを測定してデータを渡し、自宅で手軽にできる健康体操をレクチャーする「お元気度チェック」を実施。毎年参加する高齢者も多く、昨年もキャンプに参加して親しくなった学生から「○○さん、この数値が去年より上がっていますよ」と説明を受けるなど交流した。地域ふれあい交流会で高齢者の方と学生が卓球を楽しんだほか、地元の小学生とはドッジボールを通じて交流した。17、18日は各グループに分かれて、JR小高駅前や近くの工場での草取り、みょうがの栽培施設での収穫などの環境整備活動に取り組んだ。

福島県南相馬市出身の体育学部3年、サッカー部男子の池田翔（しょう）さん（学法石川高校）は初めて参加し、「福島というと、周囲から津波や震災、原発事故のことを言われるが、そのイメージをスポーツの力で変えたい。福島はサッカー、スポーツが盛んな県と言われるように。教員になったらキャンプの経験を活かして、福島の復興に尽くしたい」と感想を語っていた。

サンライズキャンプに参加した学生、教職員

東日本大震災・原子力災害伝承館を見学する学生

「お元気度チェック」で学生が高齢者に健康体操をレクチャー

地元の小学生とドッジボールを楽しむ

地域の高齢者と卓球で交流する学生

JR小高駅前や近くの工場で草取りをする学生

偉業継続12連覇

インカレ ハンドボール部女子

ハンドボールの高松宮記念杯男子第68回・女子第61回全日本学生選手権大会は11月6日、金沢市のいしかわ総合スポーツセンターで男女の決勝が行われ、ハンドボール部女子は筑波大学を35‐23（前半20‐10）で降し、最長連覇記録をさらに更新する12連覇（13回目優勝）を達成した。

ハンドボール部女子は1回戦からの5試合を通じて、ディフェンスの中央で加藤真央（スポーツ科学部1年、千葉・昭和学院高校）、中尾藍（スポーツ科学部2年、京都・洛北高校）が長身を活かして守りの中心となってリズムをつかみ、得意の速攻につなげた。再三の好守を見せたGK比嘉楓（かえで、体育学部4年、沖縄・那覇西高校）、決勝で11得点を挙げた奥山紗彩（さあや、体育学部4年、大阪・四天王寺高校）ら4年生と下級生の力が融合した。

本学男子はベスト8だった。

表彰式では、優秀選手賞に中尾、加藤、比嘉、奥山、坂下碧（みどり、体育学部4年、富山・高岡向陵高校）が、特別賞に小林実杜（みと、体育学部4年、大阪・四天王寺高校）が選ばれた。

ハンドボール部女子は2018年に男女を通じた新記録となる6連覇を達成。以後も最長連覇記録を更新し続けている。

楠本繁生監督は「12連覇という数字よりも、今年、優勝できたことのほうが大きい。学生スポーツなので1年1年選手が変わる。毎年新しいチーム、新しい選手と向き合いながら戦ってきた」と話している。

12連覇を達成し12回胴上げされる楠本繁生監督

高来葵美主将

12連覇を達成したハンドボール部女子

やり投げフェスティバル

陸上競技部が開催

陸上競技部が10月12日、やり投げの祭典「OUHS Javelin Throw Festival」を陸上競技場で開催した。

やり投げ（ジャベリン・スロー）だけの公認競技会は全国的にもほとんど例がない。競技場の芝生養生や安全管理の観点から、やり投げ、ハンマー投げ、円盤投げといった種目が実施されない地域もあるといい、やり投げ選手に少しでも多くの試合機会を提供するために、この大会が企画された。

参加者は、高校の部男女、一般の部男女に分かれ、公式試合と同じルールで実施。日本インカレ7位の須藤勇大（体育学部4年、群馬、前橋育英高校）が70m超えを連発するなど見ごたえのある試技が続いた。

また、卒業生で2011・17年世界陸上出場の宮下梨沙選手も参加し、自身の世界選手権での経験を語り、学生からの質問に答えた。

初めて開催された「OUHS Javelin Throw Festival」

侍ジャパンで4連覇

女子アジア杯5名出場

第4回BFA女子野球アジアカップが10～11月、中国・杭州で開催され、侍ジャパン女子日本代表は決勝で台湾を8-0で降し、7戦全勝で4連覇を達成した。

代表チームは全員大学生で編成され、大阪体育大学から最多の5名が出場。横井光治監督はコーチを務めた。

5名は柏﨑咲和（かしざき・さわ）投手（体育学部4年、福井工業大学附属福井高校）、山本一花（いちか）捕手（体育学部4年、大阪・履正社高校）、畑中ゆりあ二塁手（体育学部4年、埼玉・花咲徳栄高校）、木村睦実（むつみ）一塁手（体育学部4年、京都・両洋高校）、荒川莉子遊撃手（体育学部3年、鹿児島・神村学園高等部）。

柏﨑選手は12回を投げて防御率0.00で2勝を挙げ、最優秀選手と最優秀防御率を獲得。畑中選手は19打数15安打、打率7割8分9厘で首位打者、最多得点（12点）とベストナイン。日本代表で主将を務めた山本選手はベストナインを獲得した。

メンバーは12月5日、浪商学園・野田賢治理事長、神﨑浩学長に優勝を報告し、優勝メダルなどを披露した。

柏﨑選手は「優勝が決まった瞬間は一生忘れない。最高の仲間とつかめた」、主将の山本選手は「普段はライバルとして戦っている選手同士が試合を重ねるにつれ一つのチームになっていった」、首位打者の畑中選手は「インカレでは打率1割台と苦しんだが、『選ばれるだけの実力があった』と周囲に思ってもらえるよう頑張った」、唯一の3年生の荒川は「自分の強みの守備が代表でも通用することが分かった。JAPANでの経験を大学で活かしたい」とそれぞれ大会を振り返った。

野田賢治理事長らに優勝を報告するメンバー

侍ジャパンとしてアジアカップで優勝した硬式野球部女子のメンバー

坂に日本陸連新人賞

日本選手権女子砲丸投げV

国立競技場のビジョンに受賞した坂が映し出された

日本陸上競技連盟は11月12日、2025年の新人賞4人を発表し、本学から日本選手権女子砲丸投げ優勝のスポーツ科学部1年・坂ちはる（大阪体育大学浪商高校）が選出された。

坂は浪商高校1年だった2022年にU18陸上競技大会で優勝。高校2、3年でインターハイ2連覇。昨年の日本選手権では高校生ながら実業団、大学選手と競って8位入賞を果たした。大阪体育大学には、大学を挙げてスポーツ科学など多角的な支援を受けるDASH選抜アスリートとして入学。7月の第109回日本陸上競技選手権大会で自己新記録の15m76をマークし、初優勝を果たした。また、9月のU20東アジア陸上競技選手権大会（香港）では、15m25で銀メダルを獲得した。

坂は11月29日、東京・国立競技場で行われた日本陸連アスレティックス・アワードで表彰された。

坂は「賞をいただき、もっと頑張ろうという刺激になった。来季は日本選手権の連覇を目指し、1年生の今年よりももっと海外の試合に出場できるようにトップ選手に追いついていきたい」と話している。

夢かなえイタリアでプレー

「自分の可能性を信じ抜きたい」

三橋眞奈（みはし・まな）
兵庫県宝塚市出身。2016 年度、体育学部スポーツ教育学科卒業。マイナビ仙台レディースを経て 2020 年からイタリア・セリエ A の US サッスオーロ、インテル・ミラノでプレー。2023 年現役引退し、現在、INAC 神戸テゾーロ（U - 15）でコーチとして中学生を指導し、本学大学院博士前期課程で運動学を研究している。

サッカーコーチ・大学院生

三橋 眞奈さん

サッカー部女子出身の三橋眞奈（みはし・まな）さんは卒業後、3年間のプロリーグを経て、15歳のころからの夢だったイタリア・セリエA（女子1部）でプレー。引退後はクラブチームで中学生を指導する一方、大学院で学ぶ。「自分の可能性を自分が信じなくて、誰が信じるのか」。その思いで夢に向けて道を切り拓いたという。

―クラブチームコーチとして中学生を指導すると同時に大学院で学んでいる。今の目標は

大学院で選手にどうアプローチして指導するかを学んでいる。その学びを今後の指導に活かしていくことが目標。

―イタリアでのプレーを目指した理由は

小学1年の時、3つ上の兄の影響でサッカーを始め、15歳の時、知人の紹介で2週間イタリアにサッカー留学し、セリエAのトップチームで練習参加した。イタリアの選手が長身でフィジカルが強くてとにかく格好よく、「サッカーの国」の文化にも憧れて、将来はここでプレーすると決めた。

―大体大では

プロになるために強いチームでサッカーがしたいと、関西では飛び抜けて強かった体大に入学した。1回生からボランチでレギュラーを務め、2回生で全日本インカレ準優勝（2014年）、3回生でユニバーシアード3位（2015年韓国・光州）。U-23日本代表にも選ばれた。

―大体大サッカー部女子の特長は

練習メニューや普段の試合でのメンバー決定などは、監督やコーチ任せではなく、選手が作り上げていた。体大は教員を目指す選手が多いことが自主性のベースにあるのだと思うが、とてもいい勉強になった。また、相手と接触する時に球際で体をどう使うかを究めた、体大の伝統の「競り」を学べたのもプロで活きた。授業でも、スポーツ心理学でマインドコントロールやチームビルディングの理論や実践方法を学んだことはとても役に立った。

卒業後はイタリアではなく、マイナビ仙台レディースに入団した

大学に入学してすぐ、監督の石井宜子（のりこ）先生に「自分はイタリアでプレーしたい」と伝えたが、大学3年のころ石居先生から「日本のプロチームでしっかり経験を積んでからイタリアに行った方がいいのでは」とアドバイスを受け、1年先輩の選手が進んだマイナビを選んだ。

マイナビでの3年間は

人生で初めて挫折した。体大ではベンチの経験がなく、中学・高校でも常にレギュラーだったが、マイナビでは周りのレベルが高く、2年目は初めてメンバー外になった。それまで、ベンチの人やメンバー外の人の気持ちは分かったつもりでいたが、すごく悔しく、練習して何が何でもピッチに立ってやろうという気持ちだった。

イタリアに渡った経緯は

プロで3年が経ち、年齢的にも20代半ば。今チャンスを逃したら、もう海外に行けないと思い、チャレンジした。エージェントを頼み、マイナビのシーズンが終わった翌月の2020年1月にイタリアに行き、トライアウトを受けた。USサッスオーロの練習に2週間参加し、監督から気に入ってもらえて入団が決まった。

15歳からの夢が実現した

目標だったセリエAが決まり、うれしかった。自分はいつも「何とかなるやろ」の精神でいる。不安などはなかった。

入団が決まった2020年は新型コロナウイルスが世界を襲った

日本でビザを取得し、2月末にイタリアに戻ったが、その3日後にロックダウン。イタリアでも新型コロナは大流行し、2020年冬シーズンの試合はすべて中止になった。練習どころか一人暮らしの家から外に出られなかった。

翌シーズン、セリエAも再開。イタリアでプレーした実感は

全試合でフル出場し、チームも過去最高の3位。監督の信頼が厚く、必要とされていることが自分で分かった。日本人が得意とする、考えて、先読みして相手の攻撃の芽を摘むプレーや献身的な守備がチームにフィットしたのだと思う。

イタリアでプレーして良かったことは

チームの半分が外国人で、いろいろな国の人といっしょにプレーし、多様な価値観に触れることができた。街がサッカー一色に染まるイタリアのサッカー文化を肌で感じたことも大きかった。

2022年にインテル・ミラノに移籍し、2023年に現役引退。引退した理由は

イタリアに行ってから、「人生はサッカーだけじゃない。30歳を過ぎて現役を続けるより、セカンドキャリアに進んで、サッカー以外でも楽しい人生が待っている」と考えていた。自分はそれまでけがもなく、35歳まで現役を続けられたかも知れないが、「ああ引退かな」と思う日があった。

帰国後は

引退を決めて日本に帰ったが、その後、何をするのかは決めていなかった。ある日、仲がよくイタリア時代も連絡を取っていたサッカー部男子の松尾元太監督と食事した時、「大学院に行ったら面白いんじゃないか」と言われた。松尾監督自身Jリーグを経験した後、大学院に進んで大体大の監督になった。自分も大学院での勉強を、指導者としてつなげることができたらと思い、大学院に入学した。

大学院での学びは

楽しい。30歳になって深い学びができ、有意義な時間を過ごしている。大学には週3回通うほか、月曜夜はオンライン授業を受講している。専門の運動学では、指導教官の曽根純也教授から、学習者の自発的・機能的な運動を引き出す指導法である促発指導について主に学んでいる。

INACでの指導は

2024年の4月からINAC神戸レオンチーナのコーチとして高校生を指導し、今年からINAC神戸テゾーロで中学生を指導している。週6回仕事しているが、大学院と両立できている。

夢を目指して頑張っている学生にメッセージを

自分の可能性を自分が信じなくて、誰が信じるのか。夢を実現するためには、自分を信じ、努力することが大切。私は、やりたいことを口に出して実現してきた。自分はこうしたいと、家族にも先生にも仲間にも言ってきたし、イタリアでプレーする夢も大学で仲間に伝えていたと思う。紙に、イタリアに行くためにどうするか、大目標、小目標、月ごとの目標を書いた。これも体大で学んだことだ。

万博でボーシャー

熊取町ブースで大人気

大阪体育大学が9月14日、大阪・関西万博で地元の熊取町との連携事業などを紹介するポスターなどを出展し、開学60周年を迎えて今年リニューアルされたマスコットキャラクターの「BOUHSEAR（ボーシャー）」もスタッフを務めた。

EXPOメッセで開催された「大阪ウィーク～秋～」で、熊取町が「大学のある町、熊取」をテーマに本学を含む4大学のブースを設置。本学は「～これまでも、これからも、ともに～」のテーマで出展した。

この日は、万博会場にスタッフを含めて23万5000人が来場し、EXPOメッセは大勢の来場者がひしめく状態。会場は誘導が必要なほど大賑わいだった。

6月にリニューアルされた2代目ボーシャーにとって、この日は学外デビュー。熊取町のブースを訪れた方に大阪体育大学タオルを配布したが、1000枚のタオルはすべてなくなった。

ボーシャーは、子どもたちに抱き着かれたり、ハイタッチや記念撮影をしたりするなど大人気で、子どもたちから引っ張りだこ。熊取町ブースの盛り上がりに貢献していた。

大阪体育大学卒業生と記念写真

子どもに大人気のBOUHSEAR

万博でガチダンス

ダンス部が出演

大阪・関西万博会場のEXPOホール「シャインハット」で8月28日、ガチダンス2025が開催され、本学ダンス部が出演した。

ガチダンスは関西テレビ放送が主催し、NMB48がナビゲーターを務めるイベント。中学、高校、大学のダンス部やダンススタジオが参加した。

ダンスのテーマは、「三角思考Lab～マルでもバツでもなくサンカク～」。常に〝正解〟を探し続ける社会（＝マル）に疑問を投げかけ、三角のように角を持つことで対立と協力が生まれる。これが「三角思考」だ。作品全体は、研究室のような空間で、それぞれが自分だけの〝三角〟を創造していく過程をイメージしている。

今回の作品を作るうえで、小道具をどうやって際立たせるか、ダンサーの身体とどうマッチさせるかが課題だった。正解があるテーマではないので、個性を表現しつつもサンカクというモチーフを際立たせる振付を考え仕上げていく過程が面白くも大変な部分だったという。

会場の「シャインハット」は円形の舞台で、ダンス部は観客約1500人の前で作品を披露した。冒頭では笑いも起こり、終了後には盛大な拍手に包まれた。

大阪・関西万博で出演したダンス部

摂泉会55周年式典

卒業生、来賓230人出席

大阪体育大学同窓会「摂泉会」創立55周年記念式典が10月25日、大阪市北区の帝国ホテル大阪で、来賓を含め約230名が一堂に会して開催された。

摂泉会には大阪体育大学の卒業生約2万5000人が登録され、全国に各支部があり活動している。本学の開学の地である茨木市の北摂と、現在の熊取キャンパスがある泉州が名称の由来だ。

記念式典では初めに長家秀博同窓会会長から開式の言葉があり、続いて野田賢治浪商学園理事長が「全国各地で同窓会の皆さんが入学希望者をご紹介してくださり有難く思っています。これからも同窓会の皆さんにはご協力いただき、大阪体育大学の発展にお力添えをいただけますようお願いします」とあいさつした。

続いて神﨑浩学長が「大阪体育大学が開学した当時、入学定員は100名で今は両学部、大学院を合わせて7倍近くの675名が定員となっています。これだけ多くの卒業生を世の中に輩出してきたことは最大の財産だと思っています。少子化で大学経営が大変な中、もう一度建学の精神に立ち返り、なおかつ絶えず変化を続ける意識を持ち学生、教職員で大学を盛り上げていきます」と決意を述べた。

さらに各同窓会支部から推薦された卒業生、役員として長年の尽力があった卒業生の表彰式が行われ、長家会長から感謝状と記念品が手渡された。

記念式典の後は祝賀会が開催され、なぎなた部の演舞、卒業生のご家族による武術太極拳の演舞などが披露された。

「摂泉会」の 創立55周年記念式典

開式の言葉を述べる長家秀博同窓会会長

なぎなた部の演舞

永寿小の児童が来学

ノート回収の協力依頼

大阪府貝塚市立永寿小学校の児童10名が9月24日、使用済みノートや紙を集めてリサイクルするプロジェクトへの協力依頼のため、本学を訪れた。

このプロジェクトはコクヨ株式会社の「つなげるーぱ！」。文房具を利用する日本全国の子どもたちと、ノートを製造する同社が地球環境を守り、考える環境学習プログラムで、永寿小はこのプログラムに応募して当選。課外授業として近隣の学校に依頼して使用済みノートや紙を回収する活動をしている。

児童は最初に学長室を訪れ、神﨑浩学長に元気いっぱいの大声で訪問の目的とプロジェクトの内容を伝え、手作りの回収ボックスを手渡した。

その後、学生に依頼するセレモニーを教育学部・岡崎均教授の「社会科概論」の授業で行い、児童と本学OBの辻内正輝教諭から説明があった。回収ボックスは11月上旬まで図書館に設置された。

神﨑浩学長と永寿小の児童たち。左は本学OBの辻内正輝教諭

大分県が本学講座採用

運動部活動指導認定プログラム

大分県が11月2日、県庁で地域スポーツ指導者養成講習会を開催した。本学のオンライン講座「運動部活動指導認定プログラム」を活用してスポーツ指導者を養成するもので、県内3大学の55人がスポーツ科学部・中尾豊喜教授（学校教育学）の講義を受講した。

大分県は国が進める運動部活動の地域展開に向けて、2028年度までの3年間で県内在住の学生250人に本学のプログラムを受講させる計画を策定している。

受講科目はプログラムの必修60時間のうち、集合講習10時間とオンデマンド講習10時間の計20時間。修了者は県教委が「地域スポーツ指導者」として認定し、資格取得後は大分県人材バンク（クラサポおおいた）に登録してもらう。

大分県が大体大のプログラムを採用した理由は、指導者の倫理面での質の担保。オンデマンド講習は「心停止・頭頸部外傷・熱中症への対応」「安全・障害予防に関する知識・技能の指導」「体罰・ハラスメントの根絶に向けて」「女子生徒・障害のある生徒などへの配慮」「事故が発生した場合の現場対応」の5科目。いずれも、指導者として安全確保、事故防止、人権の尊重、危機管理に必要な知見として知っておくべき内容で、大分県は講習の内容を検討し、本学のプログラムを受講すれば、質の担保は可能と判断したという。

これまで、運動部活動指導認定プログラムは長崎県長与町から14人が受講、大体大と包括連携協定を結ぶ高知県から大学生6人が参加するなど自治体との連携が進んでいるが、大分県はこれまでで最大の規模となる。

大分県庁で開催された大阪体育大学運動部活動指導認定プログラムの講義

「自分の指導観を問い直すことが必要」と講義する中尾豊喜教授

前島教授に活動奨励賞

日本サルコペニア・フレイル学会

スポーツ科学部の前島悦子教授（スポーツ医学）が一般社団法人日本サルコペニア・フレイル学会から「第1回サルコペニア・フレイル指導士活動奨励賞」を贈呈された。本学が長年にわたり地域との協働で実践してきた「体力若返り講座 in 大阪体育大学」の取り組みが高く評価された。

体力若返り講座は2013年に開講され、健康に関する講義と運動実践を組み合わせたプログラムとして、10年以上にわたり地域の方々の健康づくりを支援してきた。健康科学コースの学生が地域住民の方々とともに運動に取り組み、サポートや指導を行う点に特色がある。学生はこの活動を通して、中高齢者の身体特性や健康課題を学び、健康づくりの専門家としての素養を身につけている。

第12回日本サルコペニア・フレイル学会大会（11月1～2日、熊本県）の受賞者講演では、前島教授がこれまでの取り組みや講座の特徴について紹介した。前島教授は「体育系大学が有する『スポーツ・運動』という資源を活かし、地域住民の身体機能の維持・向上に寄与できることを認めていただき、大変嬉しく思っています。今後も教育・研究・社会貢献を一体的に進めながら、地域の健康づくりに貢献したい」と話している。

第1回サルコペニア・フレイル指導士活動奨励賞を受賞し、受賞講演をする前島悦子教授

窓

◆◇「スポーツを見る権利」をどう考えますか。野球のワールド・ベースボール・クラシック（WBC、来年3月）の放映権を、米国のNetflixが獲得し、侍ジャパンの試合が国内の地上波では見ることができない可能性が高まっています。

◆◇子どもの野球離れが深刻です。日本高校野球連盟によると、今年の硬式野球部員数は12万5381人で、20年前から22％減りました。少子化を上回るスピードです。

◆◇一番心を痛めているのは、大谷翔平選手ではないでしょうか。2年前、日本全国の小学校約2万校に約6万個のグラブを寄贈しました。日本人大リーガーとしていち早くWBC出場を宣言したのも、子どもたちに野球の魅力を伝えたいという思いの表れでしょう。その大谷選手の雄姿を、お金を払えない家の子どもはライブで視聴できない可能性があります。

◆◇先日の「スポーツメディア論」の授業で、「ユニバーサルアクセス権」を取り上げました。誰もが自由に情報にアクセスできる権利で、英国では法律でサッカーW杯、五輪など関心が極めて高いスポーツは無料放送で視聴できる権利を保障しています。スポーツの価値が深く根づいている国だからこその制度です。日本も、英国並にスポーツがリスペクトされる国になるよう祈ります。

【大坪康巳】

月は見ている

コラム ボーシャー

名誉教授　和田隆夫

アンデルセンの「絵のない絵本」は、夜に出る月が、貧しい画家を慰めるために、自分が見てきた世界の話をする短編集である。これに加えてもよい話がある。もちろん、月の出ている、ある夜の出来事である。

人は、人生の重大ごとを決めるとき、悩みに悩み、相談もして決断するが、それでも不安は大きくなっていくものだ。今回は、悩み抜いたあと、「こんな決め方もあるのだ」という物語である。

私は、1981年春、西ベルリン（当時）に半年滞在し、秋にはフライブルクへ移動した。西ベルリンではゲーテ・インスティトゥートで四ヶ月ドイツ語会話を習っていた。当時「西」という冠のついたベルリンは、不思議な空間だった。ベルリンのジャズを聴きたいという密かな望みから、西ベルリンのゲーテ・インスティトゥートを選び、奇妙だが愛すべき人たちと濃密な時間を過ごした。本誌221号で紹介した作家・田中小実昌さんとの出会いもその一つである。

当時はトルコ人の多いWedding地区の学生寮に住んでいた。同じ学生寮に住んでいたプロイエッティ氏とはよく遊んだ。彼はアルゼンチンから来た形成外科医だった。

７月のある日、彼に誘われて、「ベルリンの壁」近くの、クロイツベルクの廃墟のようなビルに行った。当時、「ベルリンの壁」近くのビルの多くは無人で荒れ果てていた。そこへ若者たちが忍び込み、不法に占拠して、住みついていた。Hausbesetzer（家屋の不法占拠者）と呼ばれていた。これに対して警察は立退きの強制執行を行なっていた。するとベルリン市の対応に対して激しい抗議デモが起こり、この年九月には死者まで出る騒ぎになった。

朽ち果てようとする建物の中庭に、一人の男が籐の椅子に座っていた。口ひげをたくわえていた。日に焼けた肌に穏やかな目を持っていた。彼は、瓦礫のほかには何もない中庭で、夏の暑さと闘うように、上半身は裸だった。

ギュンター（仮名）と名乗った。生ぬるいコーラの缶を渡され、私たちは大きな瓦礫に腰かけ、挨拶の後、黙りこみ、影が長くなり、星が見えるまでそこにいた。

ギュンターはHausbesetzerで、私より年上の、小さな劇団を主宰する大学生だった。

それからは、ゲーテ・インスティトゥートの授業が午前中に終わると、アフリカ出身の友人たちとピンポンをするか、ギュンターのベース（基地）に行くかしたものだ。

九月のある晩、ギュンターの劇団の公演終了後、打ち上げに参加した。打ち解けた雰囲気のパーティは、いっせいに「これで終わり」で終わらなかった。帰ろうと思った者から、何の屈託もなく、「さようなら」と言って、帰っていった。

参加者が半分くらい帰った頃になってようやく、みんな「そろそろ潮時」と思ったのか、ぞろぞろと店を出た。

ギュンターの彼女のアンドレアは、アンのアパートに泊まると言うと、あっさり行ってしまった。

ぼくはギュンターと歩いてベースに帰ることにした。

空を見上げると、月は中天にあった。日本画家が面相筆で一筆さっと描いたような、印象深い、これ以上ないというほど細い月だった。

そして180度の全天はポプラの木々で囲まれ、黒い縁取りをされていて、星は象眼されたように一面に散りばめられていた。

七月の半ばだというのに、冷気が私を抱くように寄り添ってくる。それを、ときおり吹く風が邪魔をする。ポプラの木も、この風に邪魔されて眠れないようだ。

たわいもない話をしていたように思う。もう午前二時を過ぎていただろう。さすがに歩く人は見かけなかった。

しばらく二人とも黙って歩いた。

ギュンターは低い声で喋りだした。

「イギリスのグラスゴーへ、アンドレアと英語の勉強に行ったときさ。もう研修の終りかけの、そう、ちょうど今頃かな。土産物屋に行ったのさ」

「うん」

「そこで、ありふれた物を見つけた。幸運の蹄鉄さ。それがたつたの３ポンドなのさ。買ったんだけど」

「ありふれていないよ。そんな物を売っているなんて聞いたことがない」

「まだ、話はこれからさ。その晩、なんか本当に幸運がやって来そうな気分になってきた。アンドレアが、町の外れにある、ちっちゃなホールでリュートのコンサートがあることを思い出した。それも飛び切り安かったこともさ。いつもならそんなコンサートに行くはずないのに」

ギュンターは空を見上げ、

「・・・・いいコンサートだった。その晩、イギリスもまんざら悪くないと思ったよ。そして、部屋に帰ってきたら、きれいさっぱりやられていた。イギリスの泥棒はきちょうめんだね、全部持っていったよ」

「えっ」

「でもありがたいことに、幸運の蹄鉄だけはベツトの上に置いてあったんだ。本当に幸運の蹄鉄だろ」

ぼくたちは動くもののいない大通りの真ん中で笑い続けた。

「どうしてそんな話をするの」

「その蹄鉄がぼくさ」

答えようがなかった。

「タカはどうするんだ」

えっ、不意をつかれた。どうするんだと言われても。当時の私は自分をどうするか考えたことがなかった。何を食べるのか、何を着るのかは一生懸命考えるし、よく知っているほうだと思う。ただ、それは「何をするか」「何をすべきか」を決めたことにはならない。自分のすることは決まっていて、ただどれを選択するのかを決めるだけだった。「何をするか」、「何をすべきか」は、いつも自明のことのように私の前に存在しており、考える前に決まっていた。残っているのは、そのあとの選択だけだった。

ギュンターは突然走りだした。

「決めるぞ」

「何を」

「ぼくの未来さ」

ギュンターは石垣を指さした。

「あそこを見ろ。目を閉じて歩くぞ。右に落ちれば演劇を続ける。左に落ちれば教師になる。証人になってくれ」

ギュンターは石垣に飛び乗った。

私は息を止めて見守った。

彼は、空を見上げて、目を閉じ、静かに歩きだした。

私はすぐ後ろを歩いた。

ギュンターは簡単に落ちなかった。まるで未来を決めたくないかのように、まっすぐ歩いている。

暖かい風が地面を這うように吹いてきた。石垣にあたり、ギュンターを下から軽く吹きあげた。彼の肩が小さく揺れる。それを契機に、小刻みに身体全体が揺れだした。ギュンターは揺れを認めたくないように、歩調を速めだした。

左右の揺れが大きくなったかと思うと突然右足が大きく上がり、左へ肩から落ちていった。

慌てて駆け寄った時、彼は左肩を下にして激しく呼吸していた。

声をかけようとしたが、止めた。こんなふうに決めてもいいのだと思った。

太古の神事を見たような、心の満足があった。

この顛末を見ていた月は、明日きっと、貧しい画家に話をするに違いない。

『旧約聖書ヨブ記』のヨブ像

その後、ギュンターはギムナジウムの国語教師になり、50を過ぎてゲーテの研究で博士号をとった。最近はバーデン地方の伝統料理に凝っている。

本物を学び、極める

大阪体育大学

【大学院】
●スポーツ科学研究科
　博士（前期・後期）課程

【スポーツ科学部】（1年～2年）
●スポーツ科学科

【体育学部】（3～4年）
●スポーツ教育学科
●健康・スポーツマネジメント学科

【教育学部】
●教育学科

大学事務局
庶務部、教学部、入試部、広報室
キャリア支援部、大学院事務室

大学附置施設等
図書館、スポーツ局、社会貢献センター
情報処理センター
スポーツ科学センター
国際交流センター、学習支援室

https://www.ouhs.jp/

OUHS ジャーナル　2025 年（令和 7 年）12 月 19 日（金）
発行所：**大阪体育大学**　広報室　発行責任者 大坪康巳　協力：教育後援会・学友会
大阪府泉南郡熊取町朝代台 1-1　電話（072）453-7021　FAX（072）453-8818